

第 23 回 開発マネジメント ～ The Myth of LSE ～

ロンドンスクール・オブ・エコノミクス(LSE)の「開発マネジメント」修士課程 (MSc in Development Management) に在籍している山口照加と申します。今回はこの修士プログラムを紹介させていただきます。LSE の Development Studies Institute (DESTIN)は開発マネジメントの他に 5 つの修士プログラム(開発学、開発と文化人類学、開発と環境、開発とジェンダー、開発と人口)から成っており、世界各国から様々なバックグラウンドをもった、やる気あふれる学生が勉強しています。

私自身は 2000 年から青年海外協力隊として 2 年間セネガルの小さな村で住民の組織化を中心に村落開発普及員として活動したあと、帰国後は約 8 ヶ月、某開発コンサルタントでリサーチアシスタントとして働き、昨年秋からこの修士課程に入りました。

DESTIN

この研究科は 1990 年に設立されて以来、途上国での実務・リサーチ、国際機関でのコンサルティング、政策アドバイスなどを担ってきた先鋭の教授陣をそなえ、開発のあり方に様々な提言を発する役目を担ってきました。こうした面は開発マネジメントの授業・セミナーに反映されており、教授たち自身の現場(途上国・援助機関)での葛藤、困難、発見、進歩の実例に触れることができます。一方、DESTIN の学生は予想していた以上に途上国より EU 圏やアメリカが多いですが、中南米、中東、インド、中国など約 50 ヶ国から来ており、現在日本人は 9 人が在籍中です。

オファーされている授業の一覧や修士の取得にあたっての履修方法については DESTIN のホームページを参照してください。さらに同ホームページにて各教授の研究分野などを事前に確認されることをお勧めします。指導教官は必ずしも自分の研究内容によって割り当てられるわけではありませんが、修士論文を進める際にはやはり専門知識をもった教授に個別に相談に行くことは可能であり重要と思います。自分の研究興味が一致する教授がサバティカルなどで休職していないか、またその年にどの授業がオファーされる予定かなど、DESTIN のオフィスにメールで確認されることをお勧めします。

また DESTIN に籍を置きつつ、指導教官の承認が得られれば、DESTIN 以外の授業の履修も可能です。私自身も Social Policy Department から農村開発の授業をとっており、他にも International Relations や Economic History Department から自分の興味に合わせて DESTIN にはない授業を取っている学生も多くいます。

開発マネジメント・プログラム

必修コース (Course title : Development Management) で学ぶトピック は多岐に渡ります。制度整備、組織内・組織間運営のあり方、新公共経営 (New Public Management)、公共資源管理、参加型開発、NGO の役割、Social Fund、などを、裨益者を取り巻く途上国の環境をふまえ、援助実施機関がいかにあるべきかを探索します。よって「開発マネジメント」といってもプロジェクトの運営手法そのものを学習するのではなく、よりよい援助の実施のためには政府(行政)、市場(民間セクター)、NGO(第 3 セク

ター)などの様々な立場、特質を持った組織がそれぞれどのような役割を担い、かつ効率的で効果的な運営にはそれらが相関的にどうあるべきか、を考えるコースです。

こうしたことから、一概には言えませんが DESTIN の開発学プログラム(MSc in Development Studies) は開発の理論や関連する様々な知識を包括的に得たい、または初めて取り組みたい、という人向け、開発マネジメントプログラムはすでに途上国や援助団体での実務経験・ボランティア経験があり、それを理論と絡めて強化しさらにキャリアに生かしたい人に向いていると思います。ですから私のクラスメイトには学部卒ですぐ来ている人もいますが、NGO で 10 年働いていた、開発コンサルタントを 10 年やっていた、英国国際開発省 (DFID) で 5 年、または国連で 2 年、など多様な実務経験をもった人たちもたくさんおり、毎週のセミナー (15 人ほどでディスカッション) では理論と実務の両面から活発な討論がなされ非常に有意義で刺激的です。こうした経験の共有が、理論には何が欠けているのか、なぜ物事を変えていくことが難しいのか、などを理解する訓練となりました。そしてそれぞれ異なる立場で開発に携わってきた学生たちが「より良いマネジメント」という 1 つの同じ目標の下で意見・知識を出し合って学べたことがとてもよかったと思います。

プロジェクトコンサルティング

また開発マネジメント・プログラムの特徴は 2 学期目と春休みを使って取り組む、実際のプロジェクト・コンサルティングにもあります。Plan International, Christian Aid, Action Aid などの NGO やシンクタンクをクライアントとして、それらの団体が行っているリサーチを請け負い、2 人から 6 人のグループに分かれて取り組みます。私の場合は英国で最も大きな開発シンクタンクである Overseas Development Institute (ODI) のプロジェクトに運良く関わることができ、「援助の実効性とドナーのあり方」という現在 ODI が進めている大きなリサーチの 1 つを、私を含め 6 人のグループで行いました。最終的には 40 ページほどのプロジェクト報告書を提出し、クライアントと教授の前でリサーチ内容をプレゼンテーションで報告しました。国籍・経験とも全くばらばらなチームで自分の意見を出しつつ他と調整を図りながら進めるには困難もありましたが、それを乗り越え、最終的にクライアントの要望にあった成果品を出す、という練習は、将来、援助機関での実務に生かせる良い経験になったと思います。またこうしたコンサルティングの機会は、多くの大手 NGO や援助機関が集まるロンドンという LSE の立地条件、DESTIN の教授陣がもつ諸団体との多様な人脈と、かつての学生が残してきた実績の上に成り立っており、LSE ならではの貴重な機会であると思います。

内側から見た DESTIN: イメージの払拭 ?

最後に DESTIN および開発マネジメントでの私の個人的な感想を書かせていただきます。第 19 回で同じ LSE の古賀さんから紹介がありました「途上国における社会政策および社会計画」プログラムと DESTIN との開発へのアプローチは確かに異なります。一般的に「LSE = 経済学」つまり「DESTIN = 開発経済学 ?」のイメージは思ったより強いようにも感じます。私自身もまさに心のどこかでそのイメージを拭いきれぬまま LSE にやってきました。実際に飛び込んでみて、たしかに学部時代の経済学の知識があったからこそなんとか理解できた授業や基本文献も多くありましたが、もちろんそれだけではなく、

他の大学院でもおそらくそうであるように政治面、社会面、文化面、様々な視点から学びました。開発というものが多面性を備えおり、学問という抽象化の中ではなく、本当に今ここでなされている「人々の生活」という基本に立って考えたとき、逆に経済も、他の要因と同じく重要な役割を担うことをあらためて考え直した自分も発見しました。だからといって DESTIN は新古典派経済学の見地で開発が進められるべきとは到底考えていません。むしろ確立された経済・貿易理論、世銀や IMF などの政策方針につねに疑問を投げかけ、私たちがよりよい開発、援助のあり方を探るプロセスに努力を払うことこそが大切であると学ばせてくれた環境であると思います。

2004 年 6 月 13 日

ロンドン大学・ロンドンスクール・オブ・エコノミクス (LSE)

開発マネジメント修士課程

山口照加

[LSE : www.lse.ac.uk/](http://www.lse.ac.uk/)

[DESTIN : www.lse.ac.uk/collections/DESTIN/](http://www.lse.ac.uk/collections/DESTIN/)